

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある国の有名な陶器師が、上等とされる軽くて薄い茶わんを、殿さまに献上した。以下はそれに続く場面である。

今度、新しく、薄手の茶わんが^{注1} 上がってからというもの、三度のお食事に殿さまは、いつも手を焼くような熱さを、顔にも出されずに我慢をなされました。

「いい陶器というものは、こんな苦しみを耐えなければ、^{注2} 愛玩^{あいがん}ができないものか」と、殿さまは疑われたこともあります。また、あるときは、「いやそうでない。家来どもが、毎日、俺に苦痛を忘れてはならないという、^{注3} 忠義の心から熱さを耐えさせるのであろう」と思われたこともあります。 「いや、そうでない。みんなが俺を強いものだ信じているので、こんなことは問題としないのだろう」と思われたこともあります。

(①) けれど、殿さまは、毎日お食事のときに茶わんを^{ごらん}になると、なんとということなく、顔色が曇るのでございました。

あるとき、殿さまは山国^{やまぐに}を旅行なされました。その地方には、殿さまのお宿をするいい宿屋もありませんでしたから、^{注4} 百姓家^やにお泊まりなされました。

百姓は、お世辞のないかわりに、まことに () でありました。

殿さまはどんなにそれを心からお喜びなされたかしれません。いくらさしあげたいと思っても、山国の不便なところでありましたから、さしあげるものもありませんでしたけれど、殿さまは、百姓の真心をうれしく思われ、そして、みんなの食べるものを喜んでお食べになりました。季節は、もう秋の末で寒うございましたから、熱いお汁が身体^{からだ}をあたためて、たいへんうもうございましたが、茶わんは厚いから、けつして手が焼けるようなことはありませんでした。

(②) いくら軽くなったって、また薄手であつたとて、茶わんにたいした変わりのあるはずがない。それを軽い薄手が上等なものとしてあり、それを使わなければならぬということは、なんといううるさいばかげたことかと思われました。

① 殿さまは、百姓のお膳に乗せてある茶わんを取りあげて、つくづくごらんになっていました。

「この茶わんは、なんというものが造つたのだ」と申されました。

百姓は、まことに恐れ入りました。じつに粗末な茶わんでありましたから、殿さまに対してご無礼をしたと、頭を下げておわびを^三申しあげました。

「まことに粗末な茶わんをおつけもうしまして、申しわけはありません。いつであつたか、町へ出ましたときに、安物を買ってまいりましたので^五ございます。このたび不意に殿さまにおいでを願って、この上のない光栄にぞんじましたが、町まで出て茶わんを求めてきます暇がなかつ

たのでございます」と、正直な百姓はいいました。

「なにをいうのだ、俺は、おまえたちの（ ）にしてくれるのを、このうえなくうれしく思っている。いまだかつて、こんな喜ばしく思ったことはない。毎日、俺は茶わんに苦しんでいた。そして、こんな^{注5}調法ない茶わんを使ったことはない。それで、だれがこの茶わんを造ったかおまえが知っていたなら、ききたいと思ったのだ」と、殿さまはいわれました。

（③）「だれが造りましたかぞんじません。そんな品は、名もない職人が焼いたのでございます。もとより殿さまなどに、自分の焼いた茶わんがご使用されるなどということは、夢にも思わなかったでございます」と、百姓は恐れ入って申しあげました。

「それは、そうであろうが、なかなか感心な人間だ。ほどよいほどに、茶わんを造っている。茶わんには、熱い茶や、汁を入れるということをそのものは心得ている。だから、使うものが、こうして熱い茶や、汁を安心して食べることができる。たとえ、世間にいくら名まえの聞こえた陶器師でも、その（ ）な心がけがなかったら、なんの役にもたない」と、殿さまは申されました。

（④）殿さまは、旅行を終えて、また、御殿にお帰りなさいました。お役人らがうやうやしくお迎えもしました。殿さまは、百姓の生活がいかに簡単で、のんきで、お世辞こそいわないが、（ ）であったのが身にしみておられまして、それをお忘れになることがありませんで

した。

お食事のときになりました。すると、膳の上には、例の軽い、薄手の茶わんが乗っていました。それをごらんになると、たちまち殿さまの顔色は曇りました。また、今日から熱い思いをしなければならぬかと、思われたからであります。

②ある日、殿さまは、有名な陶器師を御殿へお呼びになりました。陶器店の主人は、いつかお茶わんを造って奉^{たてまつ}ったことがあったので、おほめくださるのではないかと、内心喜びながら参上いたしますと、殿さまは、言葉静かに、

「おまえは、陶器を焼く名人であるが、いくら上手に焼いても、しんせつ心がないと、なんの役にもたない。俺は、おまえの造った茶わんで、毎日苦しい思いをしている」と諭されました。

陶器師は恐れ入って御殿を下りました。それから、その有名な陶器師は、厚手の茶わんを造る普通の職人になったということです。

（小川未明「殿さまの茶わん」より）

注1 上がって……できあがって

注2 愛玩……大切に楽しむこと。

注3 忠義……主君や国家に真心をつくして仕えること。

注4 百姓家……農民の家

注5 調法……便利で都合がよいこと。